

グラバア俊子・森部一退職記念号

南山大学長 ミカエル・カルマノ

カトリック大学と研究

2016年の6月にドイツのベルリンで開催された日独学長会議では、大学教育の伝統である教養の位置づけが主なテーマとなっていたが、その関連で大学の研究活動についても話題に上がった。研究プロジェクトのスポンサーとなっている企業（そして政府）が研究内容と方向性を狭めるのではないかという懸念を表明する参加者がいたのである。Akademische Freiheit, 学問の自由を看板に掲げる大学であるからこそ、そのミッションに相応しい研究とは何かについての説明責任を負うのである。最近本学内でも議論された軍事研究に関する基本方針や研究倫理教育はこれに関連する事柄ではあるが、危機管理に欠かせないこのような取り組みのほかにも、カトリック大学に最も相応しい研究とは何かというテーマについても検討する価値がある気がする。

まず、「人文学部キリスト教学科紀要『南山神学』誌で公開されている論文こそカトリック大学での研究だ」というのはかなり簡略な、そして誤解をも招く答えだと言っておきたい。何故なら、論文の（キリスト教に関係がある）内容だけを基準にすれば、この記念号で祝うお二人の研究科での業績は随分低いランキングになる可能性があり、特にお二人の研究を代表するキーワードはカトリック大学の精神と繋がりにくいのではないかという印象を与えるかもしれない。靈魂の救いを解くキリスト教にとってボディワークは重要課題ではないし、そしてイエスを中心とする宗教は他の宗教（例えば仏陀の教えを解く仏教）を先ず競争相手と見なす傾向があるからである。

言うまでもなく、このような表面的な見方ではお二人が行っている研究を正しく評価できない。「ボディワーク」と「タイ仏教」というフレーズだけではお二人の幅広い研究を把握することは出来ないし、しかも「カトリック」「catholic」という言葉の元々の意味（「包括的」）を考えれば、カトリック大学に相応しい研究の定義は決して排他的なものではなく、全ての領域をカバーする営みである。お二人が長い間取り組んでこられた研究はカトリックそのものとはかけ離れた対象を取り上げているように見えるかもしれないが、両方とも人間の本質に迫る研究を行っている、と私は思う。それぞれ違う観点から人間の本質、その心を追求しているからこそ、人間とは何かをもつと“catholic”, 包括的に理解することができるのである。

どんな宗教を研究しても、その教えを次世代に伝える為に使われた言語を無視することはできない。仏教の一番古い聖典はパーリ語で伝わってきたことを考えれば、森部先生の研究が多くの人を支えてきた仏教の理解に貢献していることは、宗教間の対話を積極的に勧めてきた南山大学にとってカトリック大学の精神を強化する研究に違

いない。そしてグラバア先生の「ボディワークのすすめ」を読んで分かるように、長年続けてきたボディワークは決して身体のことだけではなく、(教育基本を引用すれば)「人格の完成」を目指す取り組みだということが見えてくるのである。両先生の南山大学の教育モットーである人間の尊厳への貢献に心から感謝する。